

北川正忠刀匠に聞く！

■刀匠になろうと思ったきっかけを教えてください。

大学時代、テレビで刀を作っている仕事を見たこと
です。それまで、刀を作る仕事があるということは知
りませんでした。それを見て、すぐに刀匠になろうと
決意したわけではありません。「こういう仕事がある
んだ」というくらい。その後、4回生になって進路を
決める時、当時専攻していた写真をこれ以上続ける
気持ちはなかったので、他に何に興味があるかを考
えた時、思い出したのが「刀匠」でした。

テレビで見た時は、ただ鉄の棒を延ばしているく
らいに思っていました。調べてみると、ひとりの刀
匠の元で最低5年以上は修行しないといけないとい
うこと、いろんな流派や掟があり、作る人によって個
性が出ることなどを知りました。大変な仕事だとい
うことがわかりましたが、逆にそこが面白そうだと
興味もわきました。知らない世界に飛び込むことへ
の不安は全然なかったです。

僕はいろんなことに興味を持つタイプなので、もし
あの時テレビを見ていなくて、刀匠という仕事を知
らないままだったら、きっと全く別の仕事をしていた
でしょうね。



土置き

—受賞作について—

■受賞作の太刀は実際にはどれくらいの期間で作ら
れたのですか。

毎年同じですが、だいたい9月ごろから2月まで
刀をつくり、そのあと研ぎ上がって完全に出来上が
るのが3月末です。受賞作の太刀は、お客さまから注
文を受けて作ったものでした。基本的に、要望がなけ
れば2尺4寸※から5寸くらいの普通の長さで作
ります。今回は、ちょっと長めのものをという注文で、
2尺6寸くらいになっています。

刃文自体は、構想というか、求めていくもの、作り
たいものの理想と現実の差がものすごくあるんです。
古刀の国宝、重要文化財になれるものと、現代で作る
ものの差、古刀を目指してちょっとでも近づけるよ
うに努力をします。

※ 1尺…約30.3cm 1寸…約3cm

■半年の制作過程のなかで、最も気をつかうところ
はどこですか。

やっぱり、焼入れですね。刀に魂を吹き込むじやな
いですけど、それが作品になるかならないかが左右
される大きな工程です。要は、焼入れが成功すれば、
その刀は作品として世に出せるけれど、失敗したら
またゼロから作り直さないといけない。ここが一番
失敗できないし、失敗する可能性も大きい。たとえ成
功したとしても、それが良いものなのか、そうでない
のかというところにも大きな差が出てきます。

■うまくいったからといって、必ずしも自分が求めているところに到達できるかはわからないというところでしょうか？

たぶんどどの刀匠もそうですけど、到達するところまでいかないですよ。実際、受賞作の太刀も、本当は違うものを出したかったんです。これは、比較的早い段階で焼入れが上手くいって、まあそこそこ良いものだし置いておこうと。他に二本準備していて、次本番、その次本番というように焼き入れしていくので、これはサブとしてとっていました。でも本番用と思っていた二本目、三本目を失敗してしまって。上手いかなかったので、仕方なく一本目を完成させました。だから受賞作の焼入れが終わった後も、「もっとこうだったら良かった、次はもっとこうしよう」と思っていました。

■何本かの候補というのは常に作っているのですか。

だいたい三、四本は作っています。それだけ作っても、焼入れ前に失敗して刀にならないものもありますし、傷が出てしまうこともあります。四本用意して一本しか残らないこともあります。一本ずつ作るのではなくて、何本かを並行して作るので、「ちょっとこれは傷つぽいから、これを初めに焼入れして、傷のないきれいなものは次の本番に置いておこう」というように計画しながらの作業です。それでも本番に失敗して別のものが残ることもあります。受賞作がまさにそれですね。自分のなかでは「残ったのは(ああ、これか。)」という感じでした。なんでこの後に作ったものが上手くいかなかったのかとも思ったけど、しょう

がないです。これしかないです。

結果的には大きな賞をいただきましたが、自分のなかでは結局、どこかで妥協しているんですね。「この刀しか(残って)ないし。」と。たぶん、正解というか、終わりは、ずっと無いです。もし本番用が上手くいっていたとしても、どこかに欠点というか、気になる部分に目がいくので。

■終わりが無い作刀活動のなかでも、目標として今後どのような刀を作っていきたいですか。

一番は、鎌倉時代や南北朝時代の「名刀」といわれる刀。僕の場合は、特に鎌倉時代の備前伝。そこに近づけるようになりたいです。その時代の刀が現代においても「名刀」であり「良い刀」と認識されていますし、今の技術ではそのような刀が作れないからというのもあるので、皆そこに行きたい、作りたいと思っています。人によっては江戸時代の「虎徹」を目指しますが、だいたいはこの時代ですね。国宝、重要文化財に指定される「名刀」は圧倒的にこの時代が多いので、作りたいという人は多いです。



焼入れ

■一人で刀を制作する過程を想像すると、孤独で自分の内面と向き合う場面も多いのではないと思いますが、気分転換に何かされていることはありますか。

いや、それが無いんですよ(笑)。あつたほうがいんでしょ(けど)・・・制作に向き合っているときはしんどいです。だから何かないかなというのはあります。出品している現代刀職展は一番歴史があつて大きいコンクールですが、別に強制ではないじゃないですか。出さなくてもいいのに、わざわざ毎年出すと決めて、ギリギリまで作業して。自分で自分を縛っているんでしょ(ね)。第三者に出せと言われてもいるわけでもないです。自分で勝手にしんどくなっています。作品の出来も賞の上下も、周りの人は別に何も言わないし思わないけど、自分のなかではやっぱり上位の賞を、良いものを、というのがあるので、だから自分で自分を勝手に縛って一人で大変になっています。

おそろしく、コンクールに出さない時は病気になるか怪我をするかで、「もう仕事ができない」という状況になった時でしょう(ね)。そうならない限り、出そうとし続けると思います。僕の師匠はじめ、無鑑査とか審査の対象外になっている人でも間違いなく毎年出しているんですよ。刀匠として上に行く人、残る人は毎年出さずし、結果も残っています。

■刀の見どころ、見てほしいところはどこですか。

見どころの一番は刃文の美しさですよ(ね)。あとは刀独特の反りや形の美しさ。そして、しっかり研がれた刀というのはこんなにきれいなんだというところを見てほしいです。



鍛錬



鍛錬

——刀をとりまく環境について——

■時代の変化とともに刀は武器から美術品となり、所有者の属性も価値観も大きく変わりました。作る側にも同じような変化は生じたと思われませんか。

ないことはないし、あるといえはあります。今は刀を使う時代ではなくなったので、切れ味という観点からみると、実際自分の刀が現代の刀匠が作った中で、

はたしてどのくらい切れるのかはわかりません。これは全ての人がそうだと思います。切れるという前提がないとダメだということもありますが、今の刀匠は、切れ味よりも美しさを重視しているのは間違いないです。その兼ね合いが難しいと思うところはあります。

例えば、「正宗」や「一文」がよく切れたのかというところ、試し切りをするようになった江戸時代以前の刀なのでそれはわかりません。江戸時代になるとすでに大切な刀になっているので、おそらく試し切りはしていない。だから実際はどうなんだろうなと。

今美術刀剣を作っている刀匠はみんなそうですけど、もし注文されたのが切るための居合刀であれば、初めに言っておきたいというのはあると思います。切るなら、切るために作るし、切るための鉄を選ぶ、要は折れないようにひと手間かけて作ります。そのあたりが昔と今と若干違うかなと思います。



鍛錬

■近年、日本刀を好む方が中高年から若年層にも広がってきました。最近刀剣を好きになった、刀剣をもっと知りたいという人に、期待することはありますか。

日本人の刀に対する興味はまだまだ低いです。外国人の方が、「刀＝美術品・芸術品」と考えている人が

多い気がします。でも、昔に比べるとハードルはだいぶ下がったとは思いますが。日本美術刀剣保存協会の会員で鑑賞会、鑑定会をするんですが、30年くらい前までは極端に言つと体育会系でした。「上の人が言うことは絶対だ」という雰囲気があつて、それこそ男性しかいなかった。今は、女性の会員もいるし、厳しさも抜けて和気あいあいといった雰囲気が出ています。まだ一見さんは行き辛い環境にはあると思いますが、変わってきてはいます。

女性や若い人に知ってもらえる、見てもらえるというのは良いことだと思います。昔なら、年配の男性が多く、若い人も男性ばかりでした。女性は刀に興味がないという人が多かった。今は20〜40代の若い女性に見てもらっていますが、その方たちが60代、70代になった時に、反対に同年代の男性の方がいなくなるんじゃないかと思えます。今の20代、30代で刀そのものが好きという男性の方が少ないですから。男性・女性にかかわらず、日本刀に対してのハードルが下がれば下がるほよいいですね。

